

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-2 2

真紀の運転するオーディオT Tクーペはスムーズに本線へ合流して加速する。

「歌っているのは誰だっけ？聞き覚えのある声だが」とシートに深くもたれて、目を閉じていた横田は問いかけた。

「エディット・ピアフです」

「あ、そっかあ……言われてみれば、そうだね。『愛の賛歌』なら聴いたことがある。この曲は？」

「『青のシャンソン』という曲です。あまり知られていませんが、恋多きピアフが一番愛した男と言われている、ボクシングミドル級世界チャンピオンへ捧げたレクイエムです。彼女のせいで、飛行機事故に遭遇して亡くなってしまった話は有名です。彼の死を契機に、彼女の人生観や歌の方向性も変わってしまったそうです」と真紀は丁寧に説明した。

横田は瞑想者のように黙っていた。

「聞いていますか？」と尋ねた真紀は、話が独善的になり過ぎたのかしらと、にわかには不安がよぎり、横田の返事を待つこともなく、曲が終りに近づいているのもかまわずに、何を思ったかアルバムの五番目に収録されている『愛の賛歌』へ曲目を切り替えていた。

真紀はじんわりと背筋に冷や汗が出てくるのを感じながら、「選曲ミスかも、選曲ミスかも」と心の中で反復していた。

「ピアフか、痛いほどのバラードだ！狭い空間で聴いているせいか、説得力のある歌声で迫ってくる。この車は音楽が鮮やかに聞こえるね。静かでいいよ」と横田は不自然に曲目が変わったことも意に介さず感動している。

真紀は杞憂に過ぎなかったことにほっとしながら、ハンドルを強く握っていた手を緩めていた。

今度の小旅行の機会を捉えて、『青のシャンソン』を糸口に、ある思惑が真紀にはあったのだけれど、小賢しい女の浅智恵かもしれないと少し心が揺れていた。

「シャンソン歌手だったら、僕はシャルル・アズナヴールだな。『イザベル』や『忘れじの面影(彼女)』などは、仕事に流したこともあるが、やはりクラシックが多いね。まっ、音楽は仕事に興が乗った時に限るが……。アトリエのオーディオの脇にCDラックがあるよね。僕の好みも知っておいて欲しいな」と横田は言って悪戯っぽい目を見せた。

後ろから来た黒のトヨタ・ハリアーが、しなやかに追い越して行った。何故かその瑣末な一瞬のスピードが真紀の背中を押した。